



Title	ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む 太宰治『黄金風景』を例に：中国語（簡体字）
Author(s)	张, 丽静; 田泉, 译
Citation	多言語翻訳：太宰治『黄金風景』. 2012, p. 48-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32741">https://hdl.handle.net/11094/32741</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2012 年 6 月 2 日 於大阪大学豊中キャンパス

ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む－太宰治『黄金風景』を例に  
中国語への翻訳作業を通じて

大阪大学大学院博士課程 張 麗静・田 泉

## 1 近現代日本小説の中国における翻訳状況

近年、日本近現代の小説作品は、中国において盛んに翻訳されている。

『日本文学漢訳史』（王向遠、寧夏人民出版社、2007 年 10 月）、『日本近現代翻訳研究』（康東元、上海交通大学出版社、2009 年 9 月）などの中国における日本近代文学の翻訳についての考察から分かるように、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、志賀直哉、谷崎潤一郎、永井荷風、太宰治、川端康成などの文壇大家、近代文学史上の著名な作家の作品の翻訳に止まらず、松本清張、水上勉、森村誠一の推理小説、渡辺純一、村上龍など、現代の人気作家の作品も多く翻訳されている。また、『中日女作家新作体系』（中国文聯出版公司、2001 年）では、津島祐子、柳美里、山田詠美、小川洋子、高樹信子、多和田葉子、川上弘美など現在活躍している女性作家への注目も見られる。

中国では日本近現代の作品を全面的に紹介している時代に入ったと言っても過言ではないだろう。

こうした中国側の日本近現代文学への関心の理由としては、大江健三郎や村上春樹など世界的な認知度を持つ日本人作家の登場によって、一般読者の日本文学に対する関心が高まったことが挙げられる。出版業界も、日本の小説に対しとくに注意を払った。

また、中国国内で続いている日本語教育への関心もその背景として考えるべきであろう。日本語学習者の増加は、日本文学を専門的に翻訳できる者の養成へとつながっている。

## 2 太宰治の中国における翻訳状況

このような状況下、太宰治の作品も多数の翻訳がなされている。初期の「魚服記」、「思ひ出」、「逆行」、「ロマネスク」など初期の短編や、中期の「満願」、「富嶽百景」、「畜犬談」、「女生徒」、「走れメロス」など、後期の「パンドラの匣」、「ヴィヨンの妻」、「人間失格」、「斜陽」などの翻訳が確認でき、同じ作品は複数の翻訳がなされるケースもある。

とくに、2009 年が太宰治生誕 100 周年にあたったことは、太宰作品の翻訳ブームをもたらした。『人間失格（「桜桃」も収録）』（許時嘉訳、吉林出版集团有限公司、2009 年 9 月）、『陰火（他「列車」「漁服記」「葉」「猿ヶ島」「地球図」など 11 作品を収録）』（郭永欽訳、吉林出版集团有限公司、2010 年 4 月）、『走れメロス（「駆込み訴へ」「トカントン」「東京八景」「ヴィヨンの妻」「富嶽百景」「如是我聞」も収録）』（鄒微・曹逸氷・李雪蓮訳、吉林出版集团有限公司、2010 年 5 月）、『パンドラの匣（「帰去来」「断崖の錯覚」も収録）』（馬傑・郭小超訳、吉林出版集团有限公司、2010 年 5 月）、『パンドラの匣（「正義と微笑」も収録）』（木木辻訳、花城出版社、2010 年 6 月）、『太宰作品選』（鄒波訳、上海外語教育出版社、2010 年 9 月）、『惜別』（於小植訳、新星出版社、2010 年 8 月）などの作品が相次いで翻訳された。

なお、本プロジェクトにおいて取り扱う「黄金風景」は、まだ翻訳されていない。

（以上、田泉担当）

## 2 『黄金風景』翻訳の問題点

まず、中国語の表現との関係で、中国語へ訳し得ない箇所があることに注意しなければならない。一例を挙げるならば、『黄金風景』中の、「私は町で何をしてゐたらう」という表現がそれに該当する。この部分を、中国語に直訳すると、次のようになる。

原文：私は町で何をしてゐたらう。

直訳：我在城里做了什么呢？

このように翻訳すると、中国語の表現として、とても練られていないものとなり、口語的でリズムカルな作品全体の調子を崩してしまう。そこで、今回の翻訳では、以下のように意識した。

訳文：我在城里东游西逛。

このようなかたちとすることで、中国語読者にも、原文のリズムが伝わるようになる。今回の翻訳では、こうした点にとくに留意し、箇所によっては意識を選択した。

ただ、中国語へ翻訳するのが難しかった箇所もある。たとえば、結末部分は、語り手の認識の有り様が見せる箇所で注意して訳す必要があるが、以下の部分は、言葉の選択に苦心した箇所である。

原文：私は立つまま泣いてゐた。けはしい興奮が、涙で、まるで気持ちよく溶け去つてしまふのだ。

訳文：我伫立在那里哭了。剧烈的兴奋也随之愉快地融化在泪水之中。

この部分の翻訳は、中国語表現において、適正なニュアンスを保ちつつ、「私」の興奮する感情を表現するために、感情の強烈さを強調する形とした。

なお、作品中の日本の風俗を中国語へ置き換えることはそれほど難しくなかった。たとえば、日本住居に関する用語「式台」・「玄関」や、また「戸籍」のような言葉は、既に古い中国の文化に見られ、中国人の読者にとって問題なく理解できるため、そのまま使用した。

(以上、張麗静担当)